

羅振玉校録『王子安集佚文』について

長谷部 剛

(一) 前言

日本に将来された漢籍のうち中国ではすでに散佚したものととして、『文館詞林』『遊仙窟』『王勃集』などを挙げる⁽¹⁾ことができる。

このうち、『王勃集』はその書名が示すとおり、「初唐四傑」の一人、王勃(字は子安。六五〇～六七六)⁽²⁾の詩文集である。王勃の詩文集は『舊唐書』卷一九〇上「王勃伝」に「文集三十卷」とあるように、もとは三十卷⁽³⁾あったことが知られる。しかし、この三十巻本は中国ではすでに散佚し、現存する『王勃集』は、例えば、四部叢刊に収められる『王子安集』、これは「明」崇禎十三(一六四〇)年に張燮が編んだテキストであるが、わずか十六巻、賦を十一首、詩を八十三首、表・啓・書・疏・序など文を百十一首収めるにすぎない。その後、『王子安集』に詳細な注を付した「清」蔣清翊『王子安集注』(光緒九(一八八三)年)においては、巻数こそ二十巻になるものの、張燮の『王子安集』に比べても、賦一首、詩十首(及び逸句二首)、文五首が多く収められているにすぎない。

日本には王勃の没後まもなくしてこの三十卷本が将来された⁽⁴⁾。日本でもまたこの三十卷本が完本として現存するわけではないものの、中国には存しない部分が残巻として今に伝わる。本稿は、この『王勃集』残巻のなかでも正倉院本『王勃詩序集』に焦点を当て、これが民国期に羅振玉の手によって『王子安集佚文』として覆刻されるまでの経緯とその後について報告するものである。

(二) 『王勃集』残巻について

日本に伝わる『王勃集』残巻は以下の四部からなる。

- ① 正倉院本『王勃詩序集』
- ② 上野氏蔵唐鈔王勃集残巻（卷二十八に相当）
- ③ 神田氏蔵「過淮陰謁漢高祖廟祭文」
- ④ 富岡氏蔵唐鈔王勃集残巻（卷二十九・三十に相当）

まず②・③・④について述べる⁽⁵⁾。②は上野有竹氏所蔵の墓誌四首（うち一首は題名のみで本文を欠く）を収める。

④は富岡桃華氏所蔵の行状一首、祭文六首、及び王勃の作ではない文五首を収める。内藤湖南博士は、③の神田香巖氏所蔵の祭文一首が、その体式・書法が①上野氏蔵のものと同じであること、④もまた②・③と同じ帙から出たものであり、これら三部の残巻すべてが唐の垂拱・永昌年間（六八五〜六八九）に鈔写されたこと、を指摘している⁽⁶⁾。

さて、本稿で主に取り上げるのは①である。正倉院には王勃の詩序四十一首が書写される卷子本が伝わり、『王勃詩序集』または『王勃集詩序』と通称される。巻尾には「慶雲四年七月廿六日」とあることから書写の年代（七〇七）が知られる。現在では昭和五十八年、平成七年の正倉院展図録（奈良国立博物館）でこの卷子本の全文図版を見ることが出来る。

詩序四十一首のうち二十首が、現行の『王子安集』には見えない、つまり中国ではすでに散佚した文であることから、明治以降、珍重されることとなった。

珍重される理由はそれだけでない。王勃没後わずか三十年後に書写されたものであるから、現行の『王子安集』よりもおよそ一千年以上も前に成立したことになり、この点で王勃集の原貌により近いと考えられるのである。

（二）『王勃集』残巻の中国への紹介

1. 羅振玉

中国で最も早い時期に①正倉院本『王勃詩序集』の重要性を指摘したのは楊守敬であろう。この正倉院本は明治期に二回にわたって石印されており、その石印本によって楊氏は「古鈔王子安文一卷跋」を著している（『日本訪書志』巻十七、一八九七年）。しかし、楊氏はこの石印本が正倉院に由来することも知らないなど、その紹介は部分的なものに止まっている。

正倉院本の全貌を初めて中国に知らしめたのは、羅振玉である。羅氏はその生涯で三度日本を訪問・滞在しているが、正倉院本の存在を知ったのは二度目の訪日、「清」宣統元年（一九〇九）夏のことであった。正倉院本入手の経

緯を、おもに羅氏の「『王子安集佚文』序」に據りつつ以下に記す。

一九〇九年の羅氏の訪日は、敦煌文書発見の報を内藤湖南博士など日本の学界に知らしめたことでよく知られているが、むろんそれだけでなく、羅氏は日本将来の古籍の収集に努めた。東京帝室博物館兼内務省囑託の平子尚ひらこ（鐸嶺と号す）氏から正倉院本の存在を知り、宮内省に連絡してその影印を企図するが果たせぬまま帰国する。帰国した羅氏のもとに平子氏から正倉院本の石印本が届くが、それは完本ではなかった。しかし、これを蔣清翊（『王子安集注』の撰者）の子、蔣伯斧に教え、①正倉院本『王勃詩序集』を『王子安集注』に附すことを勧める。蔣伯斧もまた正倉院本の完本を得ることを求めた。その後、平子氏が肺病で没し、このルートでの正倉院本の完本の入手は不可能になる。

一九一〇年、北京に在った羅氏のもとに内藤湖南博士が羅氏所蔵の敦煌文書の調査のために訪れる。その際、内藤は羅氏に②上野氏蔵王勃集殘卷・③神田氏蔵の祭文一首の影印本を贈っている。羅氏はこれに正倉院本を併せて王勃の佚文集を刊刻することを蔣伯斧に勧めるが、一九一一年、すなわち辛亥の年、秋に蔣氏は病没し、佚文集刊刻の計画は潰える。羅氏もまた辛亥革命により王國維とともに日本に亡命することとなる。

日本亡命後の羅氏は自ら正倉院本を影印しようとするが宮内省の許可を得られなかった。亡命七年後の一九一八年秋、羅氏は神田喜一郎博士から正倉院本の完本（石印本か？）を借りる機会を得た。神田博士は、佚文「過淮陰謁漢高祖廟祭文」③を所蔵していた神田香巖氏の孫に当たる。これによって羅氏は、正倉院本の存在を始めて知ってより九年の歳月を経て、一九一八年（戊午）八月正倉院本に②上野氏蔵王勃集殘卷・③神田氏蔵の祭文一首を加え、『王子安集佚文』を編むことができたのである。

この一九一八年の『王子安集佚文』は王勃の佚文を収めるだけでなく、現行の王勃の文と①正倉院本『王勃詩序集』とを校合し、両者の文字の異同を列挙した「王子安集校記」を巻末に附している。なお、羅氏はそれより以前に④富岡氏蔵唐鈔王勃集殘卷を披観していたが、これを『王子安集佚文』に加えることはできなかった。

一九一九年六月、羅振玉は長い亡命生活を終え、中国に帰国、天津に居を構える。その二年後の二十一年、④富岡氏蔵殘卷が『京都帝国大学文学部景印唐鈔本』第一集として影印され、羅氏のもとにも郵送された。羅氏が一九一八年の『王子安集佚文』にこれを加え、翌二十二年（壬戌）十月、北京にて『王子安集佚文一卷・附録一卷・校記一卷』として刊行した。⁽⁷⁾以上が、羅振玉「校録」『王子安集佚文』成立の経緯である。

2. 内藤湖南

このように羅振玉は『王勃集』殘卷を中国に紹介することに執念を燃やし、『王子安集佚文』の刊行によって正倉院本『王勃詩序集』が世間に流布する端緒をつけた人物であるが、内藤湖南博士もまた、『王勃集』殘卷の収集・復元に多く寄与したことはよく知られている。

これについては、②上野氏蔵王勃集殘卷・③神田氏蔵の祭文一首・④富岡氏蔵殘卷を影印し、さらに跋文を草した⁽⁸⁾ことに、これまでの王勃研究史ではとりわけ重点がおかれているようである。⁽⁹⁾

しかしながら、内藤博士の①正倉院本『王勃詩序集』へのかかわりについてはこれまで具体的に言及されることがなかったので、本稿において詳述したい。

まず興味深いのは、内藤博士は、明治三十六（一九〇三）年来日していた蔣伯斧と会面し、父、蔣清翊の撰になる

『王子安集注』を贈られているのである。⁽¹⁰⁾ 羅振玉「『王子安集佚文』序」を読むかぎり、蔣清翊が『王勃集』残卷の存在を知ったのは、一九〇九年の訪日より帰国した羅氏の教示によってであるように感じられる。しかし、それより前に蔣氏が内藤博士と『王勃集』をめぐって関係している以上、蔣氏は『王勃集』残卷の存在を羅氏ではなく内藤博士によって知ったのではないかと推測できる。さらに、一九一〇年、敦煌文書の調査のため北京を訪れた博士は、⁽¹¹⁾ ②上野氏蔵王勃集殘卷・③神田氏蔵の祭文一首の影印本を、羅氏だけでなく蔣氏にも贈っているのである。

また、羅氏の「『王子安集佚文』序」に拠れば、①正倉院本『王勃詩序集』の完本を羅氏に提供したのは神田喜一郎博士であって、内藤博士ではないから、内藤博士の正倉院本とのかかわり、または、羅振玉『王子安集佚文』とのかかわりは、相対的に弱く感じられる。

内藤博士と正倉院本については、「正倉院尊蔵二舊鈔本に就きて・王勃集」⁽¹²⁾を題する文がある。これに以下のようなコメントがある。

但だ羅叔言（引用者注、叔言は羅振玉の字）の校録は其平生の精審に似ずして、殊に訛脱多ければ、信賴して世に傳ふるに足らず。余も王勃集には一重の翰墨因縁あれば、盡く諸本を合し、宋の道誠注の釋迦如來成道記をも合せて、校勘寫定し、以て蔣清翊の本に廣ぎたしと思へど、志のみありて、未だ著手の暇を得ざるを恨とす。

これによれば、内藤博士は羅振玉『王子安集佚文』に厳しい評価を下していること、博士が王勃集の校訂になみなみならぬ意欲を持っていたこと、などがわかる。

では、内藤博士は具体的にどのような点で羅氏の校録に対して否定的な評価を下しているのでしょうか。管見のかりでは、この問題について論じた研究はない。どの研究者も論じていないから問題として重要ではない、ということなのであるか。

筆者は、内藤博士の羅氏校録への評価にこそ、『王勃集』残巻の持つ最も本質的な重要性が潜んでいると考える。次章でこの問題について論じたい。

(四) 関西大学図書館内藤文庫所蔵『王子安集佚文』について

関西大学図書館には内藤湖南博士とその長子、乾吉博士の蔵書が「内藤文庫」として保管されている。内藤文庫には二種類の羅振玉『王子安集佚文』を収める。すなわち、一九一八年の初刻本と、二十二年に④富岡氏蔵残巻を加えた重刻本である。

内藤文庫蔵の一九一八年の初刻本には内藤湖南博士の朱筆による批考がのこされている。以下に一覧として掲げる。

詩序篇名		羅氏校録	
夏日仙居觀宴序		龍集丹□	湖南批考
		時屬陸冗	時屬陸冗
		瞻列缺而迴鞭	瞻列缺而迴鞭

	張八宅別序	言無慙於響應	信無慙於響應
	衛大宅宴序	共樂、□□	□□、共樂
		蓋聞鳳緒參雲	蓋聞鳳渚參雲
		睽蘭席於丹巖	睽菌席於丹巖
		鮮尊候景	鮮尊候□景
		葉岫籠煙	□葉岫籠煙
		暖韶晷於巖阡	暖韶晷於巖阡
		既而香樹迎曛	既而杳樹迎曛
	秋日登冶城北樓望白下序	風濤險而翠霞晚	風濤陰而翠霞晚
		景極情監	景極情盤
	冬日送儲三宴序	對山川之風月	對山川之風日

さらに、羅振玉の「王子安集校記」にも内藤博士の朱筆による批考がのこされている（羅氏校録が空欄の場合は、内藤博士が書眉に追記したもの）。

詩序篇名	羅氏校録	湖南批考
------	------	------

梓潼南江汎舟序		以黻藻幽尋之致焉		渺然有山林陂澤之思、卷子本作眇 讎以妙論、卷子本作雜	
秋日宴季處士宅序		以黼藻幽尋之致焉		以黼藻幽尋之致焉	
越州秋日宴山亭序				猶對仙家、卷子本作由 卷子本作新都楊乾嘉池亭夜宴序	
仲氏宅宴序				嘗懷習氏之園、卷子本嘗作長、又氏作 武。則字之訛。 華字、缺末筆。	
上巳浮江宴序				瞻火雲而變色、卷子本作大 瞻尋曲渚、卷子本作窮。	
秋日登洪府滕王閣餞別序		時運不齊、命途多舛、卷子本時作其		卷子本時作大 君子見機、卷子本作安排 青雲之志、作望 酌貪泉而覺爽、覺作競 三尺微命、作五尺	

越州永興李明府宅送蕭三還齊州序	嘗謂連璧無異鄉之別、疏金好親之契、 卷子本作嘗謂連璧無異鄉之別、斷金有 同好之親	嘗謂連璧無異鄉之別、新金好親之契、 卷子本作嘗謂連域無異鄉之別、斷金有 同好之親
送劼赴太學序	送劼赴太學序	送劼赴太學序
聖泉宴序	全唐文卷百九十九載此文、作駱華王撰	全唐文卷百九十九載此文、作駱賓王撰

このように、この批考は羅振玉の①正倉院本『王勃詩序集』翻刻の誤りを指摘するものであり、これによって内藤博士が羅氏の校録について「殊に訛脱多」と指摘する理由を知ることができる。ただし、残念なことに正倉院本『王勃詩序集』の全篇に及ぶものではなく、内藤博士が王勃集の校勘および定本の寫定について「未だ著手の暇を得ざるを恨とす」と自ら述べることも首肯できる。

(五) 『王勃集』残卷の問題点

王勃の詩文を読む際に最も信頼され最も多く利用される蔣清翊『王子安集注』は、一九九五年、上海古籍出版社から中国古典文学叢書の一として刊行されている。この上海古籍出版社本は羅振玉校録『王子安集佚文』を附載するが、羅氏の校録に粗漏が多いことが明らかになった以上、佚文について言えば上海古籍出版社本もまた信頼するに足りない、と判断せざるを得ない。

上海古籍出版社本以外に王勃の佚文を収めるものとしては、以下の三種類のテキストがある。

1. 何林天校注『重訂新校王子安集』（山西人民出版社、一九九〇年）
2. 『正倉院本王勃詩序の研究』I（神戸市外国語大学外国学研究XXX、一九九五年）
3. 陳尚君「輯校」『全唐文補編』卷十五（中華書局、二〇〇五年）

これら三種はそれぞれ独自に①正倉院本『王勃詩序集』から翻字したもので、そのゆえに、三種のあいだでもテキストの文字が一致しないという現象が見られる。したがって、王勃の佚文については現在、羅氏の校録を含めて四種類のテキストが別々に存在しており、相互に文字の異同があるという状況である。原典は正倉院本一本であるのに、なぜこのような混乱した現象が出現したのであるうか。

正倉院本は行書と草書の交ぜ書きで、書風は歐陽詢の行書体の系統に属すると言われる⁽¹³⁾。つまり、文字の認識が容易な楷書ではなく、しかも巻中所々に則天文字も使用されている。そして、後半に到ると筆跡が乱雑になっており、翻字には相当な困難が伴う。

また、道坂昭廣「テキストとしての正倉院蔵『王勃詩序集』」が指摘するように、①正倉院本には誤字・脱字、さらには脱句さえ見られるのである。誤字・脱字・脱句の判断は、翻字というやや機械的な作業を越えた、解釈を伴う行為である。

右に挙げたなかで、2. 『正倉院本王勃詩序の研究』は四十一篇の全文を翻刻し、一字索引を附すばかりか、そのうち八篇については詳細な訳注が施されている。ただし、翻字の結果は内藤博士のそれにほぼ等しいものの、全く一致するものではない。同書には、関西大学図書館内藤文庫所蔵『王子安集佚文』の内藤博士批考を参照した形跡が見

られず、もし参照していれば正倉院本『王勃詩序集』の定本となりえていたであろうと思ふと残念である。

正倉院本『王勃詩序集』に第三十八篇目に配置される「秋日登冶城北樓望白下序」において、本文第二九〇句を『正倉院本王勃詩序の研究』は「灌莽積而蒼烟平、風濤險而翠霞晚」と翻字するのに対して、内藤博士は「灌莽積而蒼烟平、風濤陰而翠霞晚」としている。そこで、正倉院本『王勃詩序集』における「險」「陰」を列挙してみる。

詩序篇名	文字
山家興序	陰
秋日宴山庭序	陰
三月上巳祓禊序	陰
秋日序	陰
秋日送沈大虞三入洛詩序	陰
秋日送王贊府兄弟赴任別序	陰

<p>秋日登冶城北樓望白下序</p>	<p>秋日楚州郝司戶宅遇餞霍使君序</p>	<p>秋晚入洛於畢公宅別道王宴序</p>	<p>遊廟山序</p>	<p>秋夜於綿州羣官席別薛昇華序</p>	<p>梓潼南江汎舟序</p>	<p>聖泉序</p>	<p>上巳浮江讌序</p>	
<p>險陰 かか</p>	<p>陰</p>							
								

江寧縣白下驛吳少府見餞序

險

陰

これを見ると、「秋日登冶城北樓望白下序」の該当字は「陰」と判読するのが適切であろうと考えられる。しかし、「風濤陰」も「風濤險」もともに表現として罕見であることが、この問題を難しくしている。管見の限りでは、「風濤陰」はこの王勃の詩序にしか見られない表現であり、「風濤險」は唐代までの詩文には見られず、宋代になって始めて見られる表現である。わずか一例のみ検索し得た。

余靖「過大孤山」：不顧風濤險、半就江魚葬（『武溪集』卷一）

「風濤險」とおそらく同義であろう「風浪險」もまた宋代の用例を一例のみ検索し得た。

蔣擴「送鄧德甫」：莫畏洞庭風浪險、主翁元是濟州舟（『宋詩紀事』卷三十一）

わずかながらも（後世の）用例がある以上、王勃の詩序も「風浪險」と判読すべきとも考えられるが、本稿のこの段階では攷を俟たざるを得ない。

(六) 小結

王勃は「初唐四傑」の一人として文名を恣にしながらも、現実には、詩「滕王閣」「送杜少府之任蜀州」、および文(詩序)「秋日登洪府滕王閣餞別序」が人口に膾炙しているにすぎず、現存する作品群についての専論も多くはなく、⁽¹⁵⁾伝記上の不詳な箇所もいまだ説明されていない。大量の詩序に至ってはほとんど読まれていないに等しい状況である。それは、本稿が羅振玉の『王子安集佚文』を中心として、正倉院本『王勃詩序集』の研究状況を概観してきたなかで明確に確認された。

詩序は初唐期、楊炯・盧照鄰、そして王勃らによって集中的に制作されるものの、「初唐四傑」以降、他作の作家を見ることはできなくなる。では、なぜ詩序は作られなくなったのか——この問題を考えるためにも、まず王勃の詩序を読み、その文学的表現が詩歌とどのような点で共通するの、あるいは相違するの、詳細な検討が必要である。今後の課題としたい。

注

- (1) 日本に将来された漢籍については、池田温『編』『日本古代史を学ぶための漢文入門』(吉川弘文館)に要領よくリストアップされており、簡便である。
- (2) 王勃の伝記については不明な点が多く、生没年についても諸説紛々としている。いまここでは、植木久行『詩人たちの生と死——唐詩人伝叢考』(研文出版、二〇〇五年七月)による。
- (3) 『舊唐書』卷四十七「經籍志」下・『新唐書』卷四十「藝文志」四も「王勃集三十卷」と著録する。ただし、楊炯「王勃集序」(『文苑英華』卷六九九)には「二十卷」とある。これについて、内藤湖南「上野氏藏唐鈔王

- 勃集殘卷跋」および「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」（『内藤湖南全集』第十四卷所収）は楊炯文の訛誤と見なしている。
- (4) 蔵中進「正倉院本『王勃詩序集』について」は、慶雲四年（七〇七）三月に帰国した遣唐副使一行によって日本にもたらされた、と推測する（『正倉院本王勃詩序の研究』Ⅰ所収、神戸市外国語大学外国学研究XXX、一九九五年三月）。
- (5) ②・③・④のすべてが、『唐鈔本』に影印されている（大阪市立美術館「編」、同朋舎出版、一九八一年二月）。なお、②については、さらに興膳宏「上野本『王勃本』のことなど」（『日本中國學會便り』二〇〇四年第一号所収）を参照。
- (6) 「注」(3)所掲の二文を参照。
- (7) 『永豊郷人雜著續編』所収。『羅雪堂先生全集初編』三。
- (8) 「注」(4)所掲。
- (9) 佐藤晴彦「王勃研究小史」参照。「注」(4)所掲の『正倉院本王勃詩序の研究Ⅰ』所収。
- (10) 「注」(3)所掲の内藤湖南「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」による。
- (11) 「注」(10)に同じ。
- (12) 『内藤湖南全集』第七卷所収。
- (13) 「注」(4)所掲の蔵中進「正倉院本『王勃詩序集』について」による。ただ、『平成七年 正倉院展』（奈良国立博物館）の解説には「楷書にままた草体を交えたもの」とある。
- (14) 土井弘「著」『原色日本の美術』第四卷「正倉院」（小学館、一九六八年十二月）による。
- (15) 王勃研究の状況を概観するものとして、別稿「王勃研究の現在（仮題）」を用意している。